社会教育だより かけ橋

下北教育事務所（TEL22-1351）

令和４年７月号

社会教育だより「かけ橋」はバックナンバーも含めて下北教育事務所のホームページでご覧になれます。

下北教育事務所 ＱＲコード

令和４年度

スポーツ推進委員・スポーツ指導者 下北地区研修会

～６月２５日（土）むつ市中央公民館～

講義・実技　「地域みんなで健康づくり ～レッツ　エンジョイ エクササイズ！」

講師　むつ市ウエルネスパーク インストラクター　黒田　英知　氏

１日５分♪毎日続けられる簡単運動（椅子に座ったままで実施可能）を紹介していただきました。参加者の様子を見て、予定にはないリンパの流れをよくするエクササイズも取り入れていただきました。

【講師から】

「運動は楽しい」と思ってもらえるような雰囲気作りを最も大切にしています。できない・嫌なことを無理に型にはめるのではなく、違うやり方でできる方法を考え、思わずやってみたくなるような声がけを意識して行っています。

研修会後半には、参加者同士で２年ぶりの情報交換が行われ、活発な意見交換ができました。

【参加者の声】
- 具体的にどこの筋肉がストレッチになるか示され、わかりやすかった。言葉がけも大変やさしく取り組みやすかった。
- 他地域の課題について同じ悩みをかかえ、どんな取組をしているのかなど情報交換できてよかった。

放課後子ども総合プラン支援員等研修会（前期）

～６月１４日（火）むつ市中央公民館～

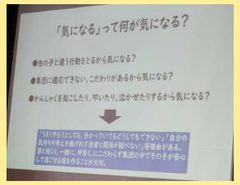
演題：「子どもや保護者とよりよい関係を築くために」

講師：青森県発達障害者支援センター Doors センター長　分枝　篤史　氏

○「子どもの見方が変われば意識が変わる。意識が変われば行動が変わる。行動が変われば子どもが変わる。」

問題行動とみるか、発達段階とみるか。話が聞けないとみるか、話の意図が伝わっていないとみるか。子どもの行動を子ども目線で見る、考える癖をつける。そこに、関わりのヒントが隠されているかもしれない。

○「気になる」って何が気になる？



「他の子と違う行動をとるから気になる？集団に適応できないから気になる？かんしゃくを起こしたり、他の子を叩いたり、泣かせたりするから気になる？」

まずは、目の前の行動が発達の偏りなのか、心と社会性の発達段階の乱れからくるものなのか等を見極め、本人が生きづらくなると想定される行動等を気にする。

○心と社会性の発達段階（ライフサイクルモデル）

時期	年齢の目安	危機的な主題	失調
乳児期	０～ ２	「基本的信頼」の獲得	不信
幼児期	２～ ４	「自律性」を身に付ける	恥・疑惑
児童期	４～ ７	「自主性」等を育むこと	罪悪感
学童期	７～12	「勤勉性」の基礎づくり	劣等感
思春期 青年期	13～22	「アイデンティティの形成」	拡散
成人期	23～35	「親密性」をもつこと	孤立
壮年期	36～56	「世代性」を生きること	停滞
老年期	56～	「人生の統合」	絶望

○つまずいたら最初からやり直す

乳幼児期のつまずきを、あとから別の方法で対処することはむずかしい。何歳になっていても、もう一度、ライフサイクルモデルの「基本的信頼」をつくるところからやり直さなければいけない。

○子どもたちの困り感を理解するために

- 課題となる行動を具体化する。
- 課題となる行動に関連する本人の特性・苦手さと、要因となり得る状況や環境を整理する。
- その行動における背景の仮説を立てる。
- 仮説に対して具体的な本人への対応方法や環境設定を行う。

○発達が気になる保護者との関わりのポイント

- 自宅での過ごし方、保護者の困り感を共有する。
- 障害がある、発達が気になるという話ではなく、「こういう場面ではうまくできない」など具体的な情報提供から。
- うまくできた時の情報提供も忘れずに。どのような場面で、どういったやり方や工夫でできたかを伝える。
- 工夫ややり方がわかれば本人も保護者も先生も楽になる。
- 信頼関係を築くには、信じて頼られるまで待つことも必要。時間がかかることは前提で！一度で解決、改善を望まない。
- 学校と保護者、放課後クラブ等で共通の連絡帳を作る。

一つの機関だけで解決できることは多くない。専門機関と連携し、より柔軟な支援を作ること

○講師からのメッセージ

無理に専門家になろうとする必要はありません。子どもたちが皆さんに求めているのは、放課後の安心安全基地なのです。子どもたちの目線で求めているものを、感じ提供するだけで、多くの問題はなくなります。失敗を恐れず、できることからやってみましょう。

【参加者の声】
- わかりやすい言葉でしたが、内容が深かったです。子どもの一見望ましくない行動や言葉を通訳できる大人になりたいです。
- 子どもと関わる上での大人の課題が、一つ一つ胸に刺さりました。人間対人間という基本をまず置き去りにしていました。
- 先生の伝える力、言葉が胸に響きました。子どもへの関わり方が今日の大きな収穫です。